

修士論文（要旨）

2015年7月

中国の大学の日本語専攻の「視聴説」授業の実態調査  
—映像リソースを使用する学習活動に対する学習者の評価から—

指導 宮副 ウォン 裕子 教授

言語教育研究科  
日本語教育専攻  
213J3904  
杜 盛楠

Master's Thesis (Abstract)  
July 2015

A study of Japanese Listening and Speaking Classes in a Chinese University: Assessing Students'  
Learning Activities Using Visual Media

Du ShengNan  
213J3904

Master's Program in Japanese Language Education  
Graduate School of Language Education  
J.F.Oberlin University  
Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

## 目次

第1章 研究の背景と目的	1
1.1 研究の背景	1
1.2 研究の目的	2
第2章 先行研究	3
2.1 「高等教育機関日本語教育指導要綱」による「視聴説」授業の教育目標	3
2.2 映像作品を用いた学習活動に対する評価について	3
2.3 ビリーフ研究の意義	4
第3章 アンケートの調査の概要と結果分析	6
3.1 D大学の概要	6
3.2 D大学の日本語専攻の大学生へのアンケート調査概要	7
3.3 学習者へのアンケート調査結果と分析	8
3.3.1 学習者が使用している素材について	9
3.3.2 映像リソースの学習経験に基づく認識	11
3.3.3 視聴説授業中での映像リソースの使用について	14
3.3.4 学習者が望む授業形態と現行の授業形態の比較	15
3.3.5 効果的に映像リソースを利用する学習方法に関する認識	17
3.4 「視聴説」授業に対して学習者の理想像と現行「視聴説」授業の現状の比較分析	19
第4章 インタビューの調査概要と結果分析	22
4.1 D大学の学習者と教師へのインタビュー調査概要	22
4.2 教師のインタビュー結果と考察	25
4.2.1 担当教師のインタビューから見る「視聴説」授業	25
4.2.2 他科目担当教師のインタビューから見るD大学の視聴説授業教育	31
4.2.3 教師インタビューのまとめ	33
4.3 学習者インタビューの結果と分析	34
4.3.1 3年生へのインタビュー調査の結果と分析	34
4.3.2 4年生へのインタビュー調査の結果と分析	37
4.3.3 学習者インタビューのまとめ	39
第5章 総合的考察	43
5.1 学習者と教師の認識のずれについて	43
5.2 「視聴説」授業への提案	46
第6章 おわりに	49
6.1 まとめ	49

6.2 今後の課題	50
-----------	----

謝辞

参考文献

巻末資料

**【巻末資料】**

資料1 「アンケート参加への同意書」	①
資料2 「アンケート調査用紙」	②
資料3 「アンケート参加への同意書中国語版」	⑦
資料4 「アンケート調査用紙中国語版」	⑧
資料5 「インタビュー調査への承諾書」	⑫
資料6 「インタビュー項目」	⑬
資料7 「インタビュー抜粋」	⑭

近年、中国の大学の日本語教育において、多様な映像リソースが利用されていることが報告されている。谷口（2012）は、日本の日本語学校での学習者が映像作品を学習リソースとして肯定的に捉え、活用していることを報告している。一方、中国における現行の「視聴説」授業では言語能力のみを重視する傾向があり、社会文化知識、異文化理解力、日本語運用力を育成するという目標が十分には達成されていないとの指摘がある（清水 2014）。そこで、本研究では中国の大学における視聴説授業の現状を把握し、また、大学の視聴説授業において映像リソースを使う学習活動について、学習者がどのような学習内容と学習方法が効果的だと認識し、どのような評価をしているかを分析、考察する。

中国の D 大学を例として、アンケートとインタビュー調査から、中国の大学の日本語学科の「視聴説」授業の現状を明らかにした（【研究課題 1】）。その結果、3 年生の「視聴説」授業では、使用している教材は日本文化を紹介する教育用ビデオのナレーションの SCRIPT であり、授業の内容は主に日本語教育ビデオを使い日本文化を紹介することである。この授業評価の結果から、学習者が望んでいる「視聴説」授業の理想像と実際に受けた授業の間にずれがあることが明らかになった。学習者が期待している授業は映像リソースを活用することを通して、総合的な日本語運用・応用能力を伸ばしたいということであったが、教師は日本文化、社会の理解を目標としており、一致していなかった。

4 年生の「視聴説」授業では、扱っている教材は正式な場面における同時通訳用の定形表現の翻訳文であった。授業内容は首脳会談など正式な場面における同時通訳の練習であった。教師の目標は高級通訳専攻の名に恥じないような授業を行うことであり、卒業生が大規模の会議の通訳の仕事を担当できるような授業内容を決めている。しかし、4 年生の学習者はこれほどレベルが高い日本語を学習することではなく、実用的な会話やコミュニケーション能力の向上を望んでいる。すなわち、言語知識を得るより、好きな映像リソースの観賞を通して、「聞く」「話す」能力が鍛えられるような授業を期待している。

次に、本研究では、現在の「視聴説」授業に対して学習者側の認識を明らかにした（【研究課題 2】）。学習者からは「日本社会、文化などの理解」「通訳能力を鍛える」ことを目標とした学習内容に対する不満が現れた。具体的には、学習者が最も求めている「言語運用、応用能力」「実用性が高い役に立つコミュニケーション能力」のいずれについても学習効果が上がっていないという否定的な評価であった。加えて、学習者は教師が一方的に授業内容を決めるよりも、学習者が学習の主体となり、自ら発話機会を増やし、参加度を高めるような授業活動が行われれば、学習効果が上がるという確固たるビリーフを持っている。

教師と学習者のインタビュー調査からは、D 大学の「視聴説」授業についての教師の間の共通認識として 1) 授業の時間数が足りないこと、2) 教科書が古いこと、3) 扱う内容の範囲が幅広く、詳細に分析する時間がないという認識を持っていることがわかった。以上は担当教師が鋭く指摘した問題でもあり、最も重大な現実問題として捉えられていることもわかった。一方、学習者へのインタビュー調査からは、1) 視聴覚素材活用の日常化とメディアリテラシー概念の形成、2) 授業活動への期待が非常に高いため、期待が叶えられないと不満が出ること、3) 実用性が高い知識を求めていること、4) 授業の期末評価の評価方法に対する不満が高いことが明らかになった。調査結果を比較分析したところ、教師側と学習者側の間の「視聴説」授業についての認識のずれが浮かびあがってきた。それは主に 1) 授業内容、目的、到達目標のずれ、2) 授業活動のずれ、3) 授業への期待のずれ、4) 評価方法と基準のずれ、であった。

上述の認識に関するずれが現れる原因を分析し、考察した結果、「視聴説」授業の位置づけ、教育の内容、養成する目標などをまず明確にしなければならないことが明らかになった。教師は言語学習の計画者、実施者として、一方的に授業の内容と形態を決めるのではなく、学習者の意見も尊重しつつ、双方の意見を総合し、授業を設計することが重要であることが明らかになった。これらの考察結果から、「視聴説」の授業の改善のための提案を以下にまとめる。1) 期末テスト評価基準と方法の改善、2) 学習者の自律性の養成、3) 映像リソースの選択、4) 日本語母語話者教師と中国人教師との協力的な連携であった。一方、授業時間数や教科書などの解決が困難な問題などは現在の中国の大学の教育環境においては、短時間にたやすく改善することができないため、限られた時間数を最大限に活用しつつ、学習者の満足度が高める授業設計を行うことが望まれていることが明らかとなった。

## 参考文献

### 【和文文献】

- 梅田康子 (2006) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割 - 学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る -」 『愛知大学言語と文化』 12, 60-68.
- 岡崎眸 (1990) 「学習者と教師の持つ言語学習についての確信」 『日本語教育と日本語学習 - 学習ストラテジー論に向けて』 第 10 章, 宮崎里司 J.V. ネウストプニー共編 くらしお出版 147-158.
- 岡崎眸 (2001) 『日本語教育における学習分析とデザイン - 言語習得過程の視点から見た日本語教育 -』 凡人社出版
- 金蘭 (2014) 「中国の大学の日本事情教育における教師の役割 - 中国S大学の調査から -」 桜美林大学修士論文
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』 新曜社
- 清水美帆 (2014) 「中国 A 大学における映像メディアを用いた日本語『視聴説』授業の研究 - 映画をリソースとした対話重視の授業実践から -」 桜美林大学修士論文
- 高橋寿夫 (2011) 「授業の活性化に向けて - グループによる学生参加型授業の実践的考察 -」 『外国語教育フォーラム』 7, 23.
- 武一美・市嶋典子・キムヨンナム・中山由佳・古屋憲章 (2007) 「活動型日本語教育における評価のあり方について考える」 WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』 2007 年度日本語教育実践研究フォーラム
- 谷口美穂 (2012) 「映像作品を用いた日本語教育 - 教師へのインタビューから見え授業の実態と課題 -」 桜美林大学修士論文
- 田中治彦 (2008) 「参加型学習の系譜」 『国際協力と開発教育 - 「援助」の近未来を探る -』 第 8 章, 明石書店 183-186.
- 張蠡 (2013) 「インプットアウトプット理論に基づく視聴説授業の教え方の模索」 『北陸大学紀要』 37, 267-269.
- 馬珊 (2015) 「映像作品を用いた日本語授業の研究 - メディアリテラシーを取り入れた実践授業からの考察 -」 桜美林大学修士論文
- 保坂敏子・土井真実 (2001) 「映像素材を使用した学習活動に対する学習者から見たピリーフ - 教室場面の学習活動の場合 -」 『小出記念日本語教育研究会論文集』 9, 24-36.
- 三國喜保子・谷口美穂・岩下智彦・川崎タルつぶら・張世襲・岩本尚希 (2011) 「日本語学習者の教室外におけるメディア使用の実態: - 6 カ国におけるアンケート調査から -」 『桜美林言語教育論叢』 7, 142-162.
- 栗カシン (2013) 「中国大連の大学生の日本語学習動機に関する調査 - 学年差と学習継続要因に着目して -」 桜美林大学修士論文

### 【中文文献】

- 教育部高等院校外语专业教学指导委员会日语组 (2000) 『高等院校日语专业高学年阶段教学大纲』 大连理工大学出版社
- 任江辉 (2013) 「大学日语视听说课程教学改革探析」 『集美大学学报 (教育科学版)』